

Title	桜井毅著 イギリス古典経済学の方法と課題
Sub Title	Tsuyoshi Sakurai, Method and perspectives of the classical political economy
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.1 (1989. 4) ,p.186- 188
JaLC DOI	10.14991/001.19890401-0186
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890401-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

桜井 毅著

『イギリス古典経済学の方法と課題』

（ミネルヴァ書房，1988年，A5判217ページ）

I

本書を評するに当たって、先ず、最近の経済学史研究の状況にかんして一瞥しておきたい。

第2次大戦後の経済学史研究は、特にわが国の場合戦前段階とは比較にならないほどに飛躍的な発展を遂げたといえよう。無論、戦前において、注目すべき、かつ、戦後の研究に大きな影響を与えた経済学史研究の業績は存在した。それらのなかから、大河内一男氏や高島善哉氏の著作をあげることにだれしも異議はないであろう。これらに共通していることは、経済学史が、過去の経済学テキストをただ読み解くと言うだけではなく、それらの読解の内に鋭く現実的課題を提起し、それに一定の打開の方向性をも与えようと意図したことであったといえるであろう。今日の言い方に即するならば、経済学史研究における道徳的要素の重視ないし道徳哲学の提示であったともいえよう。強力な社会哲学的問題意識に支えられた戦前の一部の研究は、無論戦後にも受け継がれたが、戦後の経済学史研究においては、『資本論』研究の再開と共に、理論経済学的な問題関心がよりはっきりと前面に出されることとなった。それは一面で、社会哲学的課題には——たとえイデオロギー的であったにもせよ——かなりはっきりとした線が引かれることとなったということも与っていたと思われる。経済学史がなにを解くかは、したがってきわめて明確であった。

こうした状況は、経済学史研究にプラス・マイナス両様に作用したと思われる。第1に、経

済学史研究と理論研究との一体性が明らかになった。第2に、経済学史をめぐる多様な接近にある種のかせをはめてしまった。理論経済学という基準が、陰に陽に作用した。言うまでもなくここで言う理論経済学とは、マルクス経済学のことである。第3に、経済学史研究を支える社会哲学的な側面が、歴史に参照対象を求めることを怠ってしまった。思想史研究と経済学史との有機的関連が見過ごされてしまった。元来このような方法は、マルクス経済学の独自の方法の無理解ないし誤解にその淵源を求めることができるように思われる。さらには、歴史的学説の評価の基準としての理論経済学の体系と過去の学説そのものの対話が決定的に見失われてしまったことである。

いま、このような過去の経済学史研究の状況を踏まえて、この分野の研究方向に新たなものを付け加えるとすると、それは無媒介的に思想史的学史にゆきつくものではないであろう。さらには、実証性の名に隠れた際限のない些末な資料重視がその本領と言うわけでもないであろう。この点の確認なくして本書の評価はきわめて困難である。このことは、本書が経済学史の思想史的背景や、固有の実証性を無視していることを決して物語るものではない。本書は理論史的関心を保持しつつ、これらに著者なりの均整の取れた判断を示そうとしたものであることを先ずあきらかにしておきたい。

II

まず、本書のおおまかな構成を見ておこう。

- 序 章 古典経済学の方法と歴史主義批判
- 第1章 スミス経済学成立の基盤
- 第2章 リカードウ理論の形成とジェームズ・ミル
- 第3章 不変の価値尺度論の限界
- 第4章 経済理論の有用性
- 第5章 ジョン・S・ミルと経済学の方法
- 第6章 ラムジイの価値論

第7章 1870年代と古典経済学の危機

見られるように本書は古典経済学の成立からその崩壊までを対象にした、経済学史上のトピックスを追い、各章は既発表の独立の論文から構成されている。同時にこの構成からもあきらかなとおり、著者の主たる関心の一つが古典経済学の方法論の問題にあることはあきらかである。さらに、本書の特徴として従来ややもすると厳密に過ぎて動きの取れない内容規定に陥りがちであった「古典経済学」の規定を比較的広くとり、それによって、逆に問題の所在をより明確にしえている点をも指摘しておかねばならない。

本書は先にも述べたように理論史的問題関心が表面に出され、最近の理論史離れに一つの批判的見地を用意しているといつてよいと思われる。それを如実に物語るのは、第3章であろう。「不変の価値尺度」問題は周知のように価値論史上のリカードウ研究の中心問題の一つであり、マルクス、スラッファ等のこの問題への対応は、今日依然として論議されている。とりわけ、『リカードウ全集』第4巻所収の手稿「絶対価値と交換価値」(1823)は、この問題にとってリカードウが生涯をつうじて如何なる考え方を持っていたのかを後世のわれわれが判断する貴重かつ唯一の材料である。著者はこれによりつつスラッファの解釈をも批判的検討の対象としているのであるが、ここでさらに興味深いのは、著者のこの問題に対する方法的対応ではなからうか。

著者によればこの問題は、リカードウ理論にあってはきわめて重要な意味を持つており、いわゆる労働価値説にたいしてリカードウ自身が如何なる態度を取ったかといったことに留まらない内容を持つものと考えられている。「不変の価値尺度」をめぐるリカードウのテキストは、マルクスやスラッファの観点から解釈され、かれらの理論の示す基準が絶対視される傾向が強いなかで、著者はこれらには概して批判的である。例えば、リカードウは、「不変の価値尺度」

問題を結局のところ労働が相対価値の規制因として如何に作用するかということに限定する。にもかかわらず、リカードウのテキストそのもののなかに、労働と労働力の区別視点が如何に読み取れるかという問題として、否、リカードウ自身のテキストがそれに如何に方向を定めているかという問題として捉えてくるのである。著者はここであくまでテキストに就くのである。リカードウのテキストはこの区別を必ずしも正確かつ明確に捉えているわけではない。このことを明確に主張したマルクスの意義を確認しつつも、著者はリカードウ自身におけるこれへの接近をむしろ積極的に評価しようとする。既成の理論からする尺度ではなく、その判断の尺度そのものがいかに形成されてゆくかという論点をも考慮しつつ、リカードウの理論的営為をそれに向かつての重要な一步として評価しようとする。評者はこうした著者のここでのテキストへの対応を、理論史的方法における大きな転回として評価したい。

以上のように、第3章は著者の経済学史の対象に対する基本的な態度を如実に物語っているものと考えられるが、このことはいく分方向を異にするとはいえ、第2章についても言うことができる。

第2章の課題は、リカードウ理論の成立に果たしたジェームズ・ミルの役割を如何に評価するかという問題である。周知のとおり、ジェームズ・ミルはリカードウが『経済学および課税の原理』(1817, 初版)を執筆する重要な動機を提供したとされるのであるが、著者はジェームズ・ミルがリカードウに『原理』の執筆の方法を提供したとする最近のハチスン等の成果によりつつも、ここでも理論的構想におけるリカードウの独自性と理論史上の優位とを交錯させつつ、ジェームズ・ミルのリカードウに対する助力を相対的なものと考えべきであることをむしろ主張しているといつてよいであろう。一見、『経済学および課税の原理』成立に関するきわめて素材的な問題と考えられ、ややもすると文

献考証上の問題に限定されそうだが、著者によっては理論史上の重要な画期にかかわるものとして評価されることになる。考証問題と理論問題との均整の取れた絡み合いは、この種の問題を一層深みのあるものとして改めて問題提起することに成功していると思われる。

III

本書の基本的な特徴は以上にみたとおりであろう。その表題にあるように本書は古典経済学の方法論の検討をも目指すものである。著者の意図はおそらく方法的な観点からする古典経済学の独自性は、演繹と帰納との統一といった観

点のみではなく、そのことによって社会に対するアプリオリな認識をも許すのであったこと、さらに評者なりに言えば、社会に対する総体的認識をも許すものであったということであろう。古典経済学に固有の方法論争が今日きわめて多様な解釈を許すものとなっているのも、方法論上のテキストそのものの目指すものとそれを解釈し評価するものとのずれによるところが大きいように思われるのであって、このことを著者の分析があきらかにしえていることのみをとっても本書の意義は大きいといつてよいであろう。(89/3/14)

飯田裕康
(経済学部教授)